

聖書：ヨハネの黙示録 13：11～18

説教題：その数字は六百六十六

日時：2021年5月30日（朝拝）

今日の箇所は、別の獣が地から上って来るのを見たが始まります。前回は第一の獣が海から上って来ましたが、その獣とは神と神の民に敵対して立つこの世の国家権力のことでした。その幻が示していたことは、悪魔は神に逆らって教会を迫害することにおいて一人ではないということです。12章後半で見ましたように、悪魔はイエス・キリストの十字架と復活によって決定的に敗北し、地に投げ落とされました。もはや二度と天に戻って、自分の思う通りに世界を動かすことができなくなりました。そこで激しく怒り、地上に残されている教会を迫害することへ向かいます。その際、悪魔は一人で戦うことをしません。竜は海辺に立って一頭の獣を呼び寄せました。それが前回見た13章前半の獣、この世の国家権力でした。本来、国家的為政者や統治者は神が与えてくださった良いものです。人間の罪が暴走してこの世が地獄と化すことがないように、悪に歯止めをかけ、悪を抑制し、平和と秩序が維持されるために神が立ててくださった制度です。またそれは福音が宣教されるための地盤を提供するものでもあります。しかしこの良いものを悪く用いるのがサタンです。竜は国家権力さえも自らの手下として用いて、教会を迫害することに乗り出します。その獣は度を越えて高ぶり、自らを神のように誇り、神と教会をののしり、従わない教会を攻撃する。歴史の中にまさにこの獣として現れた暴君は枚挙にいとまがありません。

これに続く今日の箇所が示すことは、この獣もまた一人ではないということです。それは第二の獣と共に働く。ここで新しく現れた獣とは何物でしょうか。12節から分かることは、この第二の獣のすることは第一の獣を拝ませることであるということです。第一の獣は、一言で言えば専制君主的な国家ですが、第二の獣は、その宣伝をする者、そのサポーター、その支持者・促進者たちと言えます。ここにはまるで父、子、聖霊の三位一体をまねたような関係があると言われます。13章2節に「竜はこの獣に、自分の力と自分の王座と大きな権威を与えた」とありましたが、これは父なる神が子なる神キリストに権威を与え、王座へと引き上げたことを映し出すかのようであると。一方、12節で第二の獣は第一の獣が持っていた権威を働かせ、第一の獣を拝むように人々を導くとありますが、これは聖霊が御子によって遣わされて働き、御子に

栄光を帰し、御子の栄光を現すことにある意味で似ていると。

果たして第二の獣はどのようにしてそのことをするのでしょう。その方法は 14 節にあるように「惑わし」です。これはこの後、この獣が「偽預言者」と呼ばれることとも一致します。16 章 13 節に「竜の口と獣の口、また偽預言者の口」と出て来ます。ここで第二の獣は「偽預言者」と表現されています。同じ表現は 19 章 20 節、20 章 10 節にも繰り返し出て来ます。ここからも竜、獣、偽預言者（第二の獣）は三位一体のような関係であることが暗示されています。この第二の獣が偽預言者と言われる所以は今日の箇所にも示されています。まず 11 節にこの獣は「子羊の角に似た二本の角を持ち」とあります。子羊は黙示録ではイエス・キリストを指します。そのキリストを映し出すかのような優美さを外見上持っています。優しく、人にとって無害であるかのように。ところが「竜が語るように語っていた」とその後に記される通り、中身は悪魔そのもの、サタンの化身的存在であると言われています。そして何と云ってもこの獣のすることは、先に 12 節で見た通り、第一の獣を拝ませることです。真の預言者は真の神礼拝へと人々を導きますが、偽預言者は偽りのものを拝むように導きま。さらに 13 節でこの獣は「大きなしるしを行い、人々の前で火を天から地に降らせることさえた」と言われています。「火を天から地に降らせる」は I 列王記 18 章のエリヤを思い起こさせます。あのように人々を圧倒する不思議なことをして見せた。当時、各地に建てられていた異教の神殿は皇帝礼拝のためにも用いられたようですが、そこには一般的に魔術師もいたようです。その彼らは不思議なわざを行って皇帝礼拝に一役買ったのでしょう。モーセが行った様々な奇跡に対して、エジプトの呪法師たちが色々対抗して見せたように。あるいは使徒の働きの中にもサマリヤにいた魔術師シモン、キプロス島にいた魔術師バルイエス、あるいはピリピの町にいた占いの霊につかれて占いをしていた女奴隷などが出て来ます。そのような各地に存在していた魔術を行う祭司的存在にサタンが力強く働いていたということでしょうか。

さらにこの獣が行ったことを 14 節以降からいくつか見て行きます。一つ目は 14 節にある通り、第一の獣の像を造るように、地に住む者たちに命じたことです。当時、ローマ皇帝を礼拝する神殿が各地に競って建てられました。この黙示録が宛てられた小アジアの地域もそうです。それぞれの町は皇帝礼拝に率先して加わることによってローマへの忠誠心を示し、それによって与えられる名声や経済的利益・繁栄を享受しようとしていました。15 節には「それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がもの

を言うことさえできるようにし、また、その像を拝まない者たちをみな殺すようにした」ともあります。当然、各地に建てられた像は生きていませんが、その像を通して特別な導きがあるかのように、ご利益があるかのように、人々を惑わしたのでしょう。当時、腹話術も盛んだったようで、物言わない像が物を言うと言われる背後に腹話術が絡んでいるのではないかと言う人もいます。あるいは実際に声が聞こえなくても、ローマ皇帝の力が生きて媒介される像として、まるでものを言う像であるかのように人々に恐れられ、拝まれていたということかもしれません。そしてこの像を拝まない者は殺されました。2章13節にはペルガモンの町におけるアンティパスという殉教者のことが記されていました。ペルガモンは「サタンの王座がある」と言われた町で、異教の神々の神殿があったことに加えて、皇帝礼拝が強力に行われた町のようなのです。その圧力に屈せず、キリストこそを主とする信仰を保ったアンティパスは殺されました。そこにはその町の当局者たち、首長たちも関わっていたと考えられます。ですからその彼らも第二の獣の一部を構成していたと考えられます。

さらに16節に「また獣は、すべての者に、すなわち、小さい者にも大きい者にも、富んでいる者にも貧しい者にも、自由人にも奴隷にも、その右の手あるいは額に刻印を受けさせた」とあります。この刻印は、7章3節で神の民の額に押されたと言われる印が目に見えないものであると同様、ここでも目に見えるものではないと考えられます。これはあくまでも象徴的表現です。「右の手あるいは額に」という表現は、申命記6章8節に、律法を「しるしとして自分の手に結び付け、記章として額の上に置きなさい」と言われている言葉を思い起こさせます。「額の上」とは「頭に」ということであり、頭は考えるところ、思考する部分を象徴します。また「手」は動かすところであり、活動を象徴します。ですから獣は人々の「思想」も「行動」も支配したということです。当時で言えばローマ皇帝に第一に忠誠を誓い、従うように、その思想も手の動きも支配した。そして17節に「その刻印を持っている者以外は、だれも物を売り買いできないようにした」とあります。つまり皇帝礼拝に参加しない者は社会から疎外されたのです。実際、主に称賛された教会の一つであるスミルナ教会は2章9節で「苦難と貧しさ」にある教会と言われました。主に忠実に歩むために苦難を受け、社会から除け者にされ、職場で昇進できないし、仕事を得ることも困難。そうして経済的に貧しい状況に追いやられていた。また2章18節から記されていたティアティラの町には同業者の組合（ギルド）があり、それぞれの組合の神のような存在があったこと、組合に参加する人は、その異教の神殿での祭りに参加しなければならず、

そこで皇帝礼拝も行われたこと、それに参加することを拒否する者は組合員になれず、従って売り買いすることができない状況にさせられたことを見ました。そのため、教会の中には、信仰を持ちつつ、これらの偶像礼拝に参加しても問題ないのだ！かえってそれはサタンの深みを知る深みのある信仰者になることだ！などと言って、信者を結局偶像礼拝へ導く女預言者イゼベルやバラムの教えを奉じる人、ニコライ派の教えを述べる人たちがいたことも見ました。そんな中、これらの誘惑に抵抗して主にのみ従う人々は経済的繁栄から取り残され、日常生活もままならない、いわば村八分状態に追い込まれました。このように第一の獣ばかりか第二の獣も力を持って迫って来る中、信者たちはどのように歩めば良いのでしょうか。

そのことについて最後 18 節に「ここに、知恵が必要である」とあります。先の第一の獣に関する箇所最後の部分、10 節後半に「ここに、聖徒たちの忍耐と信仰が必要である」とありました。その忍耐と信仰がここでも必要なことは言うまでもありません。しかしここでさらに「知恵が必要である」と言われています。つまりよく考える必要があるということです。洞察が必要である。「思慮ある者はその獣の数字を数えなさい」とあります。そしてその数字は 666 であるとあります。これはどういう意味でしょうか。多くの人がこの謎を解こうとして色々なことを考えます。特に言葉を数字に置き換えてカウントするいわゆるゲマトリア法によって、これが誰を指すかを推測しようとする試みがなされて来ました。そしてネロであるとか皇帝カエサルのことであるとかヒトラーのことであるとか言われます。しかしこの獣はある特定の一人のことではなく、いわゆる教会時代全般に見られるもののことです。ですから個人ではなく、全体的に見る方が理にかなっています。また黙示録で数字は象徴的に用いられていることをいつも考慮すべきです。結論的に最も妥当と思われるのは、黙示録で繰り返し使われる 7 は完全数を指すのに対して、6 は「それに達していない」という意味を持つ数字であることです。ですからこれは不完全、不十分、不足していること、満ちていないことを意味する。その数字が 3 つ重ねられています。3 は三位一体と関係するもう一つの完全数です。するとどうなるのでしょうか。不完全な 6 が 3 つ重ねられることにより、それは「全くの不完全」、あるいは「完全な不完全さ」を強調するものになるのではないのでしょうか。18 節に「それは人間を表す数字である」ともあります。これはどういう意味でしょう。難しいところですが、ある学者たちが言っていることは、これは人間が 6 日目に造られたことと関係するということです。そしてこの 6 は神なしの人間の状態を現している。7 日目の神の安息あるいは神の祝福があつてこそ

人間は真の人間として生きる者となる。その神から離れた6の状態の人間では不十分、不完全なものでしかない。獣はそのような神から離れた状態にある人間全体を象徴する存在である。それは自分を神のように持ち上げ、神の真似をし、神のふりをしているが、全く足りていない。不完全な者。そしてそのような者として最後にはさばかれる運命にある。19章20節：「しかし、獣は捕らえられた。また、獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた者たちと、獣の像を拝む者たちを惑わした偽預言者も、獣とともに捕らえられた。この両者は生きたまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれた。」 第一の獣も、第二の獣も、最後にはこうなると言われています。666だからです。その刻印を受けた者たちも同じ運命を共にすることになるでしょう。そのことを見据えて歩め！ということでしょう。

今日も竜であるサタンは教会を迫害するために国家権力を用いますし、また国家権力に第一の忠誠を誓うようにと宣伝し、煽り立てる第二の獣をも起こして用います。ヨハネの時代に異教の宗教家や祭司たちが人々を惑わし、皇帝礼拝を促進させたように、今日も政治権力は異教宗教を用い、これと結託して同じようなことを推し進めようとするかもしれません。またヨハネの時代に各地方都市の議会や首長たちが率先して皇帝礼拝の政策を進めたように、今日も自治体リーダーや公的立場にある人たちがそのための圧力やプレッシャーをかけて来るかもしれません。またヨハネの時代に教会の中に形式的に偶像礼拝や皇帝礼拝をしても構わないと教えるイゼベルやバラムの教えなどがあったように、今日も心で信仰を保ってさえいれば外的には偶像礼拝的行事に参加しても良いという妥協を勧める偽りの教えが教会の説教壇から語られ、あるいはインターネット等を通じて盛んに発信されるかもしれません。困難にあるクリスチャンは自分の味方になる都合の良い教えはないかとネットを検索し、それを見つけて自らを正当化し、それらの教えに流されやすい状況に置かれるかもしれません。そんな中、今日の箇所は「ここに、知恵が必要である」と語っています。獣は様々な形を取って今日も私たちに働きかけ、主に忠実に歩もうとする者の前に困難を置き、主から引き離そうとします。なおも主に従おうとする信仰者を迫害し、困難へ追いやるために働いています。この世では獣が力を持っており、クリスチャンであってもこの獣に従うことがこの世を歩む上では得策である、やむを得ないと考えるように私たちは仕向けられます。しかし、知恵が必要です。思慮ある者は、その獣の数字を数えなさいと言われてしています。その数字は666です。いかに今、獣が力をもって世を支配しているように見えても、それは一時的であり、不完全。やがてさばかれる運命にあ

ります。666 だからです。そのことを見て取って、恐れることなく主に第一の忠誠をささげて歩む者へと導かれたいと思います。666 ではなく、777 である完全な神こそを仰ぎ、その方が導き入れてくださる完全な救い、真の安息と祝福へ進む神の民の歩みとされて行きたく思います。